

アフリカにおける臨地教育 ー広島女学院大学国際教養学部の試みー

伊藤千尋

1. はじめに

国内外の地域情報に容易にアクセスできるようになった現代社会においても、実際に現地へ赴き、見聞きすることの重要性は失われていない。特に、アフリカをはじめとする途上国に関する日本語の情報は限定的であり、中学高校の地理教育においてもアフリカが取り扱われる割合は少ない。そのため、船田(2010)が示すように、「貧困」「紛争」「野生動物」など大学生はアフリカに対して一面的なイメージを持っていることが多い。

一方、アフリカは2000年代以降の急速な経済成長によって、今や世界が注目する「最後のフロンティア」へと変貌した。中間層の出現、大規模な都市開発、中国によるアフリカ進出、携帯電話の急速な普及といった出来ごととは、現代アフリカを象徴する事象である。大学生、ひいては一般の多くの日本人が持つ「アフリカイメージ」と「現在進行形のアフリカ」との間にあるギャップを埋め、多角的な地域理解を築かせることは、大学教育における重要な課題のひとつであると言える。

上記の課題に取り組むための鍵となるのは、大学における臨地教育(海外研修・フィールドワーク)である。学生個人による海外旅行とは異なり、大学における臨地教育は、専門的知識を持つ教員による指導に沿って事前・事後学修や現地でのプログラムを実施する点で、教育効果が高いと考えられる。しかしながら、アフリカ諸国を対象とする事例は依然として少ない¹⁾。その理由としては、アジア諸国と比べて費用が高額になること、治安への不安、日本からの距離、アフリカ研究を専門とする教員が少ないこと等が関係していると考えられる。また、アフリカを対象とした海外研修を行ったとしても、科目の特徴や手続き、リスク管理、事前・事後学修の内容、成果といった大学を超えて共有されるべき内容が公開されていないことが多い。

筆者は、広島女学院大学国際教養学部において、2017年度「アジア・アフリカフィールドワークⅠ・Ⅱ(以下、AAFW)」を担当し、2017年8-9月に学生6名とザンビア共和国を訪れた。上記の問題意識をふまえ、本論文では、AAFWの科目の特徴や現地でのプログラム、教育効果について検討する。また、海外フィールドワークを実施する上での課題についても検討したい。

2. 科目および対象地域の概要

2.1 科目の概要と手続き

AAFWは国際教養学部の2年生以上を対象とした科目である。参加学生は春学期・秋学期にそれぞれ開講される「アジア・アフリカフィールドワークⅠ・Ⅱ」を履修し、事前学修、現地での研修、事後学修(報告論文・感想レポートの執筆含む)に取り組むことになる。

参加者は6名(4年2名、3年4名)である。表1は、参加学生の学年、メジャー²⁾、海外渡航経歴を示している。6名全員がこれまでに海外渡航経験があった。また、参加学生全員がこれまでに筆者が担当する講義・演習を履修したことがあり、アフリカへの関心は高かった。

現地での滞在期間は、2017年8月26日から9月5日までの11日間である。プログラムは、『アフリカの「現在」を肌で感じ、日本とアフリカの関係、経済発展や開発援助がコミュニティに与える影響について考える』ことを目的として、引率者である筆者が企画・調整を行った。

航空券・海外旅行保険は旅行代理店に一括して依頼した。査証については、筆者が全員分の書類を取りまとめ、駐日ザンビア大使館へ送付し、取得した。そのほか、現地でのプログラムの調整、レンタカーや宿泊先の手配は筆者が行った。学生には予防接種(破傷風・A型肝炎・黄熱病)および外務省による海外旅行登録システム「たびレジ」への登録を義務付けた。

表1 参加学生の特徴

No	学年	メジャー	海外渡航経験	これまでの海外渡航先
1	4	アジア・アフリカ研究	あり	シンガポール、アメリカ、台湾
2	4	公共政策	あり	カンボジア
3	3	アジア・アフリカ研究	あり	オーストラリア、フィリピン、オランダ
4	3	公共政策	あり	オーストラリア、カナダ、フランス
5	3	環境学	あり	ベトナム、香港
6	3	アジア・アフリカ研究	あり	タイ

出所：筆者作成

2.2 対象地域の概要

今回渡航先として選定したのは南部アフリカに位置するザンビア共和国である。ザンビアは2006年から引率者である筆者が現地調査を行っている国である。図1に示すように、今回の主な滞在先は首都・ルサカ、ルサカ州チルド県ルシト（筆者が調査を行っている農村部）、南部州シアボンガ県シアボンガ、ローワーザンベジ国立公園である。

ザンビアの人口は約1659万人、首都はルサカである。ルサカは国内最大の都市であり、2010年の統計によると約170万人が居住している（CSO, 2013）。ザンビアは旧イギリス植民地であり、1964年に独立した。公用語は英語であるが、国内には約73の民族が居住しており、それぞれの地域・民族により使用言語は異なる。都市部の観光・宿泊施設においては英語が用いられているため、観光客が苦勞することは少ない。

ザンビアはアフリカ諸国のなかでも、比較的政情が安定している国である。主産業は鉱業である。植民地時代に開発が始まった国内北部の銅鉱山から産出される銅が主要な輸出品となっている。2000年代前半から、債務帳消し措置や中国資本の流入により経済成長を遂げてきたが、銅価格に左右されやすい経済体制が依然として課題となっている。

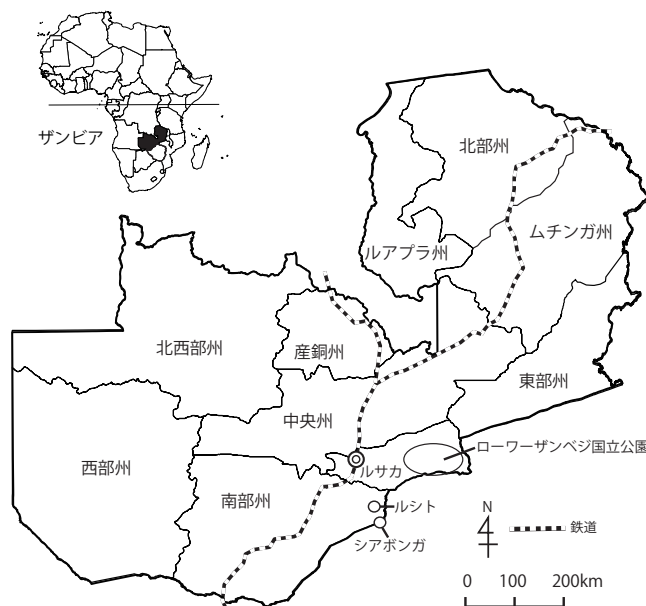


図1 アフリカ大陸におけるザンビアの位置とザンビアでの主な滞在先

注：ルシトは2013年に南部州シアボンガ県からルサカ州チルド県へ組み込まれることになった。地図は旧州区分を使用している。

出所：筆者作成

3. 実施内容

3.1 事前学修

事前学修の内容は主に、熱帯病・危機管理、ザンビアの基本情報、各自のテーマに関する調査研究、プレゼンテーションの準備、に分けられる。

まず、熱帯病・危機管理については、筆者が作成した資料に従って講義を行った。破傷風、A 型・B 型肝炎、狂犬病、黄熱病などに関する基礎知識や、現地で注意すべき点について説明した。また、広島市内で予防接種を実施している医療機関について周知した。参加学生には破傷風、A 型肝炎、黄熱病の予防接種を義務付け、その他は今回の渡航先でのリスクの低さをふまえて任意とした。危機管理については、現地での行動について注意すべき点を説明した。

ザンビアの基本情報については、参加学生がそれぞれ自然環境、歴史、政治、経済、民族、日本との関わり、について調べてきたことを発表し、全員で共有した。

各自のテーマに関する調査研究については、参加学生が定めたテーマについての文献研究を行った。参加学生は最終的に報告論文を執筆することを見据えて、テーマを設定した。テーマに関連する学術文献を各自が要約して発表し、全員で議論を行った。

プレゼンテーションの準備は、渡航中に予定されていたザンビア大学との交流会に向けた準備作業にあたる。広島や日本文化を紹介する内容を学生が準備し、英語での発表練習を行った。

上記以外に、野生動物保護や住民との関係について研究している目黒紀夫氏（広島市立大学国際学部）に講義をしていただき、アフリカにおける野生動物保護の現状や問題点について議論する場を設けた。

3.2 ザンビアでの研修内容

ザンビアでの滞在は 2017 年 8 月 26 日から 9 月 5 日までの 11 日間であった。表 2 は滞在中の旅程を示している。各プログラムはその目的により、①アフリカと日本の多様な関わり、②農村・地方都市の実態、③野生動物と人間の関係、の 3 つに分類できる。

表 2 現地研修のスケジュール

	日	スケジュール	宿泊地
1 日目	8月26日	広島発－羽田－シンガポール	
2 日目	8月27日	シンガポール－ヨハネスブルグ－ルサカ着	ルサカ
3 日目	8月28日	午前：豊田通商ザンビア訪問 午後：ザンビア大学にて交流会	ルサカ
4 日目	8月29日	午前：国際協力に携わる日本人（山本ひとみ氏）へのインタビュー 午後：ルシトへ移動	ルシト
5 日目	8月30日	午前：農村生活・文化体験 午後：農村生活・文化体験、シアボンガへ移動	シアボンガ
6 日目	8月31日	午前：シアボンガ散策、カリバダム見学 午後：ルサカへ移動、在ザンビア日本大使館表敬訪問	ルサカ
7 日目	9月1日	午前：ローワーザンベジ国立公園へ移動 午後：野生動物観光を体験	ローワーザンベジ国立公園
8 日目	9月2日	野生動物観光を体験	ローワーザンベジ国立公園
9 日目	9月3日	午前：ルサカへ移動 午後：ルサカ市内散策	ルサカ
10 日目	9月4日	ルサカ発－ヨハネスブルグ－シンガポール	
11 日目	9月5日	シンガポール－羽田－広島着	

出所：筆者作成

【①アフリカと日本の多様な関わり】

アフリカと日本の関わりといえば、国際協力を通じた支援の関係がイメージしやすい。しかし、実際には国際協力以外にも、日系企業の進出、若年層による社会的企業、教育を通じた交流など日本人がアフリカと関わる分野・方法は多様である。今回のフィールドワークでは、アフリカと日本の多様な関わりを実感してもらうために、日系企業訪問、ザンビア大学と交流会、国際協力に携わる方へのインタビュー、在ザンビア日本国大使館訪問、といったプログラムを組み込んだ。

まず日系企業に関しては、「Toyota Tsusho Zambia (豊田通商ザンビア)」を訪問した。豊田通商ザンビアは、豊田通商株式会社のアフリカ拠点である「Toyota Tsusho Africa (Pty) Ltd.」(南アフリカ共和国)の支店として、2013年に創設された。主な事業として、銅取引、大規模農業、農産物加工業、の3点に取り組んでいる。

訪問時には、農産物加工業に関して話を伺った(写真1)。豊田通商ザンビアは、グアと呼ばれるマメ科の植物(guar、学名は *Cyamopsis tetragonoloba*)を取り扱っている。グアは増粘剤や安定剤として食品をはじめとした様々な製品に利用されるグアガムの原料となる。筆者が調査を行っている農村部にも豊田通商ザンビアと取引する生産者がいるため、この分野に関する話を重点的に伺う運びとなった。ザンビアにおいて事業を進めていくことの難しさや、農民の生産意欲を高める工夫など、様々な観点から話を伺った。あくまでも企業として事業を実施しながらも、現地の事情を考慮し、住民に寄り添ったビジネスを展開することを重視している豊田通商ザンビアの姿勢には、学生も関心を寄せていた。



写真1 企業訪問時の様子

出所：筆者撮影

ザンビア大学との交流会には、文化交流という目的とともに、同世代の若者と交流することでザンビアをより身近に感じてほしいという狙いがあった。交流会は北海道大学ルサカオフィス³⁾の協力を得て、本学の学生によるプレゼンテーションと、ザンビア大学で日本語を学んでいる学生たちによるスピーチコンテストという二部構成で実施した(写真2・3)。

本学の学生はツアー形式で広島歴史や日本文化を紹介するプレゼンテーションを行った。日本語を学んでいる学生だけでなく、それ以外の学生からも質問が投げかけられるなど、広島や日本について関心を持ってもらうことができた。スピーチコンテストでは、英語やそれぞれの民族語にくわえて、日本語を熱心に学び、聴衆の前で堂々とスピーチする同世代の学生の姿勢に、感心する様子が見られた。また、近年では、衛星テレビで放映されているアニメをきっかけに日本に関心を持ったというザンビア人学生もあり、イベント終了後には歓談する姿も見られた。



写真2 ザンビア大学でのプレゼンテーションの様子

出所：筆者撮影



写真3 質疑応答の様子

出所：筆者撮影

国際協力は従来から日本とザンビアを繋ぐパイプであるが、政府間援助、NGO や NPO による支援など様々な立場がある。今回は、ザンビアで国際協力の活動に携わる山本ひとみ氏に話を伺い、歓談する場を持った(写真4)。山本氏は JICA の専門家や NPO での活動など、様々な立場から国際協力に関わってきた経験を持ち、現在は個人で活動している。山本氏は、関わっている住民が変わりたいと思っている場合に一緒に考え、手助けをしていきたい、という自らの考えを語ってくれた。また、国際協力という側面だけでなく、1 人の女性のキャリアとしても山本氏の経験は興味深く、全員が話に聞き入っていた。特に参加学生のなかには国際協に関心があり、フィリピンやカンボジアへボランティアで訪れたことがある学生もいたため、質問が多く飛び交った。

また、在ザンビア日本国大使館を訪問した際には、特命全権大使・側嶋秀展氏と話をする機会が得られた。側嶋大使からは、対ザンビア ODA の現状について話を伺うことができた。外交官の方に話を聞く機会が減多にあることではないため、学生は大使ご自身の外交官としての国際的な経験についても関心を持ち、質問を投げかけていた。

このように滞在中には、ビジネス、教育や文化、国際協力など様々な分野におけるアフリカと日本の関わりについて知る機会を設けた。学生たちは、それぞれの分野や立場によって、ザンビアの課題に対する認識や住民との関わりにおいて相違点が見られることを実感していた。



写真4 山本氏へのインタビュー

出所：筆者撮影

【②農村・地方都市の実態】

ザンビアでは依然として多くの人口が農村部に居住している。アフリカ農村について日本人が抱くイメージとしては、「貧困」といった負のイメージのほかに、「伝統的な暮らし」や「陽気な人々」というイメージも多いのではないだろうか。しかしながら、たとえ経済的指標において「貧困」だとしても、農村部の住民が何もせず受け身で支援を待っている訳ではもちろんない。彼らも私たちと同じ時代を生き、常に変化する状況や困難に対峙しながら日々を営んでいる主体である(伊藤, 2015)。このことを少しでも実感してもらうために、筆者が10年来調査を続けている農村部に滞在するプログラムを組み込んだ。

筆者は、2006年からルサカ州チルンド県に位置するルシトという農村部にて長期滞在型の調査を行ってきた。ルシトは幹線道路沿いに位置し、ルサカから3時間ほどでたどり着くことができる。ルシトにはトンガと呼ばれるバンツー系農耕民が居住している。農村にはもちろん宿泊施設がないため、筆者のリサーチアシスタントに依頼し、学生を宿泊させてもらった。このような経験は、現地に長年関わってきた教員がいるからこそ可能になったプログラムであるといえる(写真5)。



写真5 学生が滞在した村の様子

出所：筆者撮影

参加学生の多くは、滞在期間中、最も印象に残っているプログラムとしてルシトでの滞在を挙げた。住民の主要言語はトンガ語であるため、学生はほとんど言語によるコミュニケーションを取ることができない。しかし、子どもや女性たちに混ざって遊んだり、髪結いを体験したりとすぐに打ち解けていた(写真6・7)。学生は、特に住民の寛容さに対して感心していた。例えばレポートには、「言葉が通じないにも関わらず、笑顔で歓迎してくださり、私たちが快適に過ごせるよう、大変親切にしてもらった」という記述や、「当初はよそ者ということで私たちが敬遠するのではないかと心配だったが、よく知らない外国人のために泊める場所や美味しい食事を与えて下さり、温かくもてなしてくださった村の皆さんの懐の深さに、感服するばかり」といった記述が見られた(写真8)。また、昼食で食べるためのヤギを解体する作業に立ち会ったことも、学生にとっては印象深い出来事となっていた(写真9)。学生からは、「動物に対する日本人の接し方や食のあり方について、改めて考えさせられた」といった声が聞かれた。

ルシトから50キロほどの距離に位置する地方都市・シアボンガにも訪れた。シアボンガは、カリバ湖沿岸に位置する人口2万人ほどの地方都市である。短時間の滞在ではあったものの、周辺農村部の住民が出稼ぎに来ている様子や、地元住民が利用する市場を観察した。市場では、山のように積まれた古着など、日本との陳列方法の違いにも注目が集まっていた。



写真6 村の子どもたちと遊ぶ学生の様子
出所：筆者撮影



写真7 髪結いを体験する学生の様子
出所：筆者撮影



写真8 滞在先のホストファミリーとの記念撮影
出所：筆者撮影



写真9 屠殺に立ち会った際の様子
出所：筆者撮影

今回のプログラムのなかで、実際に現地の人々と深く関わったのは農村部での滞在であった。そのため特に、農村滞在の経験によって、学生たちは「アフリカ」や「ザンビア」として一括りに見ていたイメージや、「貧困」という一元的な見方とのギャップに気づくことができていた。例えば、「ザンビアの方の性格も底抜けに陽気なわけではなく、どちらかと言えば穏やかで少しシャイな印象を抱きました。もちろん人それぞれですが、歌って踊って賑やかなのがアフリカの方の特徴だと思っていたので、これも固定概念の一つだったのだと気づかれました。(中略)。日本でアフリカのことについて学んで、多少はそういった先入観を失くせていると思っていたのですが、自分でさえ思いもしなかった角度からのイメージと現実のギャップがあることに気がついたので、紙面上の知識で完結せず、実際に赴き、接することの重要性を改めて実感しました」という記述があった。これらの気づきはシンプルなものであるが、固定化されたイメージは、筆者が講義や演習等で写真や動画を見せながら伝えても崩すことは難しいと感じることが多い。その他の場面においても、今回のフィールドワークのなかで、学生たちは自らの固定観念に気づき、修正するということを直接体験から学んでいた。

【③野生動物と人間の関係】

アフリカ大陸は世界の陸地面積の約20%を占め、その多様性に富んだ気候や地形から多くの動植物の生息地となっている。貴重な動植物を保護するために、国立公園や自然保護区がアフリカ各地に設置されている。国立公園や保護区は、「野生の王国・アフリカ」を実感する場のひとつであり、多くの観光客が訪れている。

その一方、国立公園や保護区に設定された地域に居住していた住民は、居住地の移動や、これまでと同じように生業を営むことができなくなる、といった問題に直面している。また野生動物が住民の居住域へと出没することで、農作物を食べられたり、人に危害が加えられたりする問題も生じている(目黒, 2014)。学生たちは事前学修において、広島市立大学・目黒氏より、これらの野生動物保護をめぐる諸問題とその歴史的背景について学んだ。

これらの状況をふまえ、フィールドワークでは、ザンビア南東部に位置するローワーザンベジ国立公園に滞在し、野生動物観光を体験した。サファリツアーでは、国立公園の入り口にはゲートが設置されているが敷地の全てに柵が設置されている訳ではないことなど、事前学修で学んだことを実際に目で確かめることができた(写真 10)。また、国立公園内を移動している間に、欧米系の観光客とすれ違う場面が多くあり、学生は野生動物が観光資源として活用されている実態に触れることができた。今回のサファリでは、ライオンやゾウ、インパラ、バッファローなど多くの動物が観察できた。学生にとっては動物園でしか見たことがない動物を、間近に見ることができ、貴重な経験となった(写真 11)。

予定よりも移動に時間を要したため、国立公園の周辺に位置する集落を訪問することはできなかったが、事前学習も含めて、自然保護を単純に「善きもの」として捉えるのではなく、それらの言説や政策と隣合わせに住民の生活があることを考える機会となったといえる。



写真 10 ローワーザンベジ国立公園の入り口

出所：筆者撮影



写真 11 間近にゾウを観察している学生

出所：筆者撮影

3.3 事後学修

事後学修では、振り返り、報告会に向けたプレゼンテーションの準備、報告論文の執筆を行った。振り返りでは、各学生に「見聞きしたこと」「疑問に思ったこと」「考えたこと・新しい発見」をポストイットに記入してもらった。全員分のポストイットを模造紙に貼り、KJ 法により分類した。日本に帰国してから思い返すことにより、日本や他国との比較という相対的な視点によりザンビアでの経験を考えることが可能になっていた。

完成した模造紙を見ながら、各自考えたことや報告書に組み込む内容について議論した。報告論文で取り扱われるテーマは、日本による対ザンビア ODA、中国－ザンビア関係と日本、ザンビアの言語状況、古着流通、都市計画といった多岐に渡るものとなった。短期間の滞在ではあったが、現地で見聞きしたことをふまえながら、先行研究を整理していく作業を行った。また、学内で実施される報告会に向けたプレゼンテーションの準備や、各自の報告論文の執筆に取り組んだ。

4. おわりに：海外における臨地教育の効果と課題

本論では、広島女学院大学国際教養学部において初めての試みとなったアフリカでの臨地教育について、その取り組みを報告してきた。3.2 で既に述べたように、実際に現地を訪れることによって学生には様々な教育効果が見

られた。その代表的なものは、アフリカ、ひいては途上国全般に対して抱いている「イメージ」や「固定観念」を、直接体験に基づく自らの気づきによって修正することが可能になったという点である。学生自身もこれを認識しており、レポートには「現場で見ることの重要性」「自分の足で現地に行って体験することの重要性」に関する記述が多く見られた。

また、変化するアフリカを実感する場面も多くあった。特に、都市部で近年増加しているショッピングモールにおいてレストランやスーパーマーケット、各種のサービスが充実していることや、宿泊施設で Wi-Fi が利用できること等に驚き、「想像以上に発展している」と感じていた(写真 12)。また、「ニーハオ」と中国語で声をかけられることや、街中に多数存在する中国語の看板を見たことから、中国－アフリカ関係の深化について実感する場面も多かった(写真 13)。その一方で、今回のフィールドワークで訪れた地域がザンビアの一部であることも認識しており、多角的な視点で地域を理解しようとする姿勢が養われていた。



写真 12 首都ルサカで増加するショッピングモール

出所：筆者撮影



写真 13 都市部で多く見られる中国語の看板

出所：筆者撮影

そして、参加学生全員が帰国前に「まだ帰りたくない」「もっと滞在したい」と発言したことや、レポートに「また訪れてみたい」「アフリカの別の国にも訪れてみたい」といった記述があったことから、今回の取り組みがザンビア、そしてアフリカに対する学生の関心を高め、今後の学修意欲を高めることにも繋がったのではないかと考えられた。

上記のように、臨地教育によって得られる教育効果が感じられる一方で、課題も存在する。それは、引率教員の負担や、学生の金銭的負担、である。今回は、滞在中に大きな病気や怪我はなく、トラブルに巻き込まれることもなかった。しかし海外研修においては不測の事態が発生する確率が高く、海外での引率者は 2 人以上必要であると感じた。また、アジアと比べると、アフリカ諸国は航空運賃や滞在費が高額となるため、参加学生の金銭的負担も大きかった。そのためこのような取り組みを続けていくためには、大学やそれ以外の機関からの経済的支援も重要となるであろう。

そして、今回のような臨地教育を実施するためには、現地に精通している教員の存在が不可欠である。事前・事後学修や現地での説明など、専門的に研究している教員でなければ伝えられない情報が含まれるからこそ、臨地教育の効果は高まる。しかし特に小規模の大学にとっては、大学内に在籍している教員やその専門性には限りがある。そのため、例えば県内の他大学と連携し、学生が様々な国・地域における臨地教育の機会を得られるような仕組みづくりも必要なのではないだろうか。このような提案は、制度上、困難は多いと想像されるが、臨地教育の充実化に向けて取り組んでいくためには、今後、他大学や関係する諸機関との情報共有・連携は重要になるのではないかと考えられる。

注

- 1) 先進的な取り組み事例としては、早稲田大学によるタンザニアでのボランティア活動(岩井, 2010) や、長崎大学によるタンザニアでの現地調査の取り組み(阿部・牛久, 2017) がある。
- 2) 国際教養学部はメジャー制を採用している。学生は13のメジャーのなかから、3年次進級までにメジャーを選択する。
- 3) 北海道大学は、文部科学省が実施する「留学コーディネーター配置事業(サブサハラ・アフリカ)」を委託されており、その一貫として日本語教育プログラムを運営している。

謝辞

アジア・アフリカフィールドワークを実施するにあたり、多くの皆様にご協力をいただきました。現地でのプログラムを企画・実施するにあたっては、矢藤強様(豊田通商ザンビア・駐在員事務所長)、山本ひとみ様、大門碧様(北海道大学ルサカオフィス)に大変お世話になりました。農村部での滞在にあたっては、ルシトの住民の皆様に温かくもてなしていただきました。また、在ザンビア日本国特命全権大使・側嶋秀展氏には、多忙なスケジュールのなか学生との面談にお時間を割いていただきました。改めて皆様のご協力に感謝申し上げます。

事前学修では、目黒紀夫先生(広島市立大学・国際学部)に講義をしていただきました。また、本学国際教養学部 Timothy Wilson 先生にはプレゼンテーションの原稿を添削していただき、学生の指導をしていただきました。快くご協力くださった皆様に感謝いたします。

最後に、授業の運営を支えてくださった学科の教員、職員の皆様、そして学生を快く送り出してくれた保護者の皆様のご協力に改めて御礼申し上げます。

参考文献

- 阿部哲・牛久晴香(編) 2017.『ザンジバルに学ぶ多文化社会の生き方ー長崎大学多文化社会学部海外フィールドワーク実習調査活動報告書』長崎大学多文化社会学部.
- 伊藤千尋 2015.『都市と農村を架けるーザンビア農村社会の変容と人びとの流動性』新泉社.
- 岩井雪乃 2010.「ボランティア体験で学生は何を学ぶのかーアフリカと自分をつなげる想像力」人間環境論集 10(2): 1-11.
- 船田クラーセンさやか 2010.「アフリカ×日本関係の現在ー遠くて近いアフリカ」船田編『アフリカ学入門ーポップカルチャーから政治経済まで』明石書店, pp.11-33.
- 目黒紀夫 2014.『さまよえる「共存」とマサイーケニアの野生動物保全の現場から』新泉社.
- Central Statistical Office (CSO) 2013. “2010 Census of Population and Housing: Migration and Urbanization Analytical Report. Lusaka: Republic of Zambia.